

祖父と父からイングリが受け継いだもの

森川慎也

カズオ・イングロの文学では理想主義とノスタルジアという二つの概念が重要なテーマとなる。たとえば、初期作品では老齡の語り手が若かりし頃の職業的理想をノスタルジックに回想する。*An Artist of the Floating World* (1986) の Masuji Ono、*The Remains of the Day* (1989) の Stevens がその典型である。別の論考で、筆者はイングロの理想主義的人物造形が、彼が青年期を送った 1960 年代のイギリスの理想主義、さらに青年時代に読み耽ったプラトンの思想に由来するのではないかと論じたが (森川 24-38)、本稿の前半では、この理想主義を 20 世紀前半の上海の東亜同文書院で学んだ彼の祖父石黒昌明の来歴に関連づけて考えてみたい。他方、イングロ文学に見られるノスタルジアは、彼自身の長崎への個人的郷愁から幼少期全般への普遍的郷愁へと拡張している。このノスタルジアの概念的拡張は、父石黒鎮雄の影響——具体的には鎮雄が上海での幼少体験を息子に語り直した事実——が背景にあったからではないかと考えられる。そこで本稿の後半では、1990 年代後半に父鎮雄がイングロに語った幼少時代の上海の記憶を取り上げる。本稿は、伝記的手法を採用し、イングロ文学に見られる二つの概念の形成に祖父と父の影響を読み取ろうとするものである。

祖父昌明は 1884 年滋賀県大津市に生まれ、日露開戦翌年の 1905 年に東亜同文書院に五期生として入学した (平井 30)。同文書院が上海に創設されたのは 1901 年。各都道府県から選抜された給費生が在学生の多数を占め、内地のナンバースクールに匹敵する名門校と評された (西所 29)。日中共存共栄を実現するための「エキスパートを養成する」理念のもと (西所 7)、1945 年の閉校まで 45 年にわたって四千数百名の卒業生を輩出した。商業専門学校としてスタートした同校では中国語の習得が重んじられ、一年生が校庭で中国語の発音を練習する風景は「書院カラス」と呼ばれ、学校の風物になった (後年、朱牟田夏雄が同校で英語を講じている)。同文書院の伝統の一つに「大旅行」という中国全土・東南アジアを対象とした実地調査旅行があった。大旅行が始まったのは五期生からで、昌明もグループでの熱河旅行を報告書にまとめ、学友会発行の『会報』の第六号 (1908 年) に寄稿している。大旅行に出立する上級生に向けて下級生が歌った大旅行壮行の歌「嵐吹け吹け」の作詞を担当したのも昌明と同じ五期生の阿南鎮民である (安澤 59)。同じく五期生でのちに外交官として活躍した石井猪太郎は、同文書院で培われた「中日両国の唇齒輔車観念」によって自身の「ユートピア的理想」が育まれたと自伝で述べている (qtd. 栗田 150)。二十五期生の安澤隆雄も同文書院が「理想実現に働く人材の育成」に注力したと回顧している (安澤 18)。

東亜同文書院の歴史は、西洋列強の帝国主義的拡大に遅れまいと中国に乗り込んだ日本の歴史の一部を形成する。日本軍の上海への進出は「日本の帝国主義的な拡張政策を体現」したものであるという見方もあり (榎本 147)、事実太平洋戦争開始後日本軍は共同租界に侵攻し英米人の収容を始めた。その様子は J. G. Ballard の自伝的小説 *Empire of the Sun* (1984) に詳しい。共同租界における日本軍の横暴な所業は、戦争末期の上海を回想した堀田善衛の『上海にて』で冷徹な筆致で描かれている。日中共存共栄という理想を掲げたはずの書院生たちも従軍通訳として戦争に駆り出された。彼らの大旅行調査報告書が軍部に提出されたという指摘もある (西所 9)。西所正道は、多くの書院生たちが共存共栄の理想と敵国侵攻という現実との「捩れ」に苦しんだのではないかと推察している (西所 10)。この捩れを克明に描いたのが、四十四期生大城立裕の『朝、上海に立ちつくす——小説 東亜同文書院』である。都道府県から選抜されたという「自負心」が書院生たちの「連帯」を強めた (大城 76)。彼らの「理想は高く (77)、「東亜同文書院というのは、理想高邁」(247) という台詞も同作に挿入されている。しかしその理想は 1945 年の同文書院の閉校と共に露と消える。

むろん昌明が同文書院で学んだのは 20 世紀初頭である。大城が描いた 1940 年代半ばの上海に彼の姿はなかった (昌明は長崎に移住し隠居生活を送っていた)。したがって同時代の書院生の理想をそのまま若き日の昌明の人間像と結びつけることは危険である。しかし同文書院卒業後も中国に残り、30 年近く中国に住み続けた昌明の来歴を考慮するならば、彼もまた同文書院の理想の実現に奔走した同窓の一人だったと推断することもできるのではないだろうか。思えば、イングロが描く老人は、*A Pale View of Hills* (1982) の Ogata にしろ、「The Summer after the War」(1983) の Oji にしろ、*An Artist of the Floating World* の Ono にしろ、戦時下の国家主義的貢献という理想を掲げ、戦後にその理想を一方的に否定される立場に追い込まれる。イングロは両親から祖父昌明の来歴について聞かされるうちに、昌明の過去に理想と現実の「捩れ」があったことを知ったのではないか。つまり、イングロの描く理想主義的人物の中核に、東亜同文書院の理想主義とは言わずとも、同校で育まれたであろう祖父昌明の理想主義的傾向が影を落としている可能性があるというのである。

イシグロの父鎮雄は1920年に生まれ、幼少期を「上海や天津」で過ごした(平井 30)。七歳で長崎に移住し、福岡の明治専門学校で電気工学を学び、卒業後は陸軍に入隊し、東京で終戦を迎えた。戦後は中央气象台、長崎海洋气象台に勤め、エレクトロニクス技術を用いた潮位や高波の研究で認められ、1960年にイギリスの国立海洋研究所に主任研究員として着任し、以後定年まで勤め、2007年に八十七歳で永眠している(平井 37, 42, 44)。鎮雄にインタビューした平井杏子によれば、鎮雄の母(イシグロの祖母)が亡くなった1981年、鎮雄は葬儀のために帰国し、「父昌明の上海時代の写真やアルバム」をイギリスに持ち帰ったそうである(平井 43)。テキサス大学オースティン校ハリー・ランソム・センターに所蔵されている Kazuo Ishiguro Papers (以下、KIP) によれば、(イシグロが *When We Were Orphans* (2000) を執筆していた) 1998年に鎮雄は長崎を訪問している。長崎中央図書館で上海に関する文献のリストを作り、『写真集 懐かしの上海』(編者小堀倫太郎、1984年)を複写し、そのコピーを息子に送った。日本語が読めない息子のために同著の数多くのキャプションを英訳している(KIP, Box 86)。鎮雄は几帳面に英文をタイプした手紙の中で上海での幼少時代にも触れている。同封された1930年代の上海地図には、自宅、Jessfield Park、Yu Yuen Road (Youeng Roadと表記)、イギリス人子弟のパブリックスクール、東亜同文書院の位置に蛍光ペンで印がつけられている。その手紙には、昌明が鎮雄を同スクールに通わせようとしたが、戦争のために断念したとある。共同租界の西側に伸びる Yu Yuen Road 沿いに自宅があり、そこから目と鼻の先にあった Jessfield Park に石像の馬が設置されていた。鎮雄はその石像の感触を回想している(KIP, “Dear Kazuo”)。石像に跨った幼い鎮雄の写真も同センターで保管されている。

イシグロは鎮雄から直接上海時代の思い出話を聞き、その話の内容をメモにしている。それが “Notes: SHANGHAI After Photographs conversation with Daddy (Shizuo) 4th May 1997” というメモである(KIP, Box 26, Folder 3)。タイトルに “Photographs” が含まれていることから、上海時代のアルバムを見ながら父と会話したと想像される。メモには自宅の間取りも書き込まれている。イシグロのイラストによれば、二階の二つの部屋には畳が敷かれてあり、部屋は襖で仕切られていた(林京子の『ミッシェルの口紅』でイギリス人差配が日本人の改装に不満を抱くエピソードを想起させる)。ドアの外側は蝶番がついて西洋風なのだが、内側は「偽の (false)」襖のデザインがされてあったとイシグロはメモしている。イラストの下のメモでも「本物 (authentic, genuine)」と「偽物 (false, pretend)」という対立語が用いられ、その様式的乖離は *When We Were Orphans* に登場する日本人少年 Akira の上海の自宅を語り手 Christopher Banks が回想する描写に活用されている——“Most remarkable were the pair of ‘replica’ Japanese rooms [...] one could not tell one was not in an authentic Japanese house” (71-72) 上海という多文化空間で暮らす子供たちは両親以上にアイデンティティの拠り所を自らが帰属する国家に求めるが、成人した二人の幼少期へのノスタルジアは物語の後半で一気に普遍の様相を帯びる。1980年代にイシグロが描いたノスタルジアは彼個人の長崎への郷愁に基づいたものだったが、1990年代以降は幼少時代全般に対する郷愁という公約数的なノスタルジアへと拡大していった。そこには鎮雄が上海時代のアルバムを持ち帰り、1990年代後半に自身の上海の記憶を息子と共有した事実があったからではないだろうか。鎮雄の上海の記憶はイシグロに受け継がれ、上で見たように一部ではあるものの彼の小説に取り込まれている。

祖父昌明と父鎮雄が過ごした20世紀前半の上海をイシグロは直接には知り得ない。したがってイシグロの上海は祖父から父へ、父から子へと語り継がれることで形成されたものである。祖父から父へ、父から子へと語り継がれた記憶がイシグロの創作に作用し、次第に彼自身の長崎の記憶と融合しながら、理想主義そしてノスタルジアという彼の世界観を醸成していったとするならば、イシグロの中に祖父と父の生き様が脈々と流れていると言える。それこそ祖父と父からイシグロが受け継いだものなのではないだろうか。

引用文献

Ishiguro, Kazuo. *When We Were Orphans*. Faber and Faber, 2000.

Kazuo Ishiguro Papers (KIP) . Harry Ransom Center. The University of Texas at Austin.

——. “Dear Kazuo.” (Shizuo’s letter to Kazuo, 3-11-1998) Box 86.

——. “Notes: SHANGHAI After Photographs Conversation with Daddy (Ishiguro) 4th May ’97.” Box 26, Folder 3.

安澤隆雄『東亜同文書院とわが生涯の一〇〇年』愛知大学東亜同文書院ブックレット①、あるむ、2006年。

榎本泰子『上海 多国籍都市の百年』中公新書、2009年。

大城立裕『朝、上海に立ちつくす——小説 東亜同文書院』中公文庫、1983年。

栗田尚弥『上海 東亜同文書院 日中を架けんとした男たち』新人物往来社、1993年。

西所正道『「上海東亜同文書院」風雲録 日中共存を追い続けた五〇〇〇人のエリートたち』角川書店、2001年。

平井杏子『カズオ・イシグロの長崎』長崎文献社、2018年。

森川慎也「カズオ・イシグロと理想主義」『年報 新人文』第15号、2018年、10-57頁。